

ナイトセッション 「日本の海洋学における人材育成とポスドク問題について」

主 催:
日本海洋学会教育問題研究会
海洋若手会

コンビーナー:
伊藤進一(水研セ・東北水研)
井上龍一郎(海洋研究開発機構)
吉江直樹(愛媛大CMES)
森岡優志(日本学術振興会特別研究員)

背景(1/3)

ポスドク問題:

Wikipedia

大学院修了後の職をとりあえずポスドクに求めた大量の博士号取得者の就職問題が深刻化している。2008年現在で国内のポスドクのうち最年長といえる者が40代半ばに達しようとしている。このままではそのような状況に置かれる者が年々増大していくと危惧されている。

朝日新聞

科学技術創造立国をめざす国は、博士号取得者の量産に取り組んできたが、就職の受け皿となる大学や公的研究機関のポストを増やすなかったため、1万人以上のドクターが正規の職につけていない。企業への就職をいかに聞くかが課題になっている。

「大学院重点化」(1995年にほぼ完了)・「ポスドク1万人計画」

労働契約法改正

有期労働契約が反復更新されて通算5年を超えたときは、労働者の申込みにより、期間の定めのない労働契約(無期労働契約)に転換できる。

逆ポスドク問題

背景(2/3)

関係機関での動き

日本学術会議

2007年公開シンポジウム「研究・教育者等のキャリアパスの育成と課題」

国の動き

研究開発システムの改革の推進等による研究開発能力の強化
及び研究開発等の効率的推進等に関する法律(平成二十年六月十一日法律第六十三号)、2008年

JpGU

2007年に若手有期雇用研究員を対象にアンケート調査
キャリアパス支援プログラムを実施

気象学会

日本気象学会と日本学術会議IAMAS小委員が若手研究者の実態把握と意識調査を実施(2008年3月):会員全員対象

SySPDMet(Supporting System for Postdoc Researchers in Meteorology)の立ち上げ

背景(3/3)

教育問題検討会の試み:

テクノオーシャン2010

シンポジウム「海洋科学の大学院教育は企業の即戦力たりえるか?」

豊川・藤井(2011, JOS News Letter)

ナイトセッション2011

震災で中止。

Brix et al. (2003) " An International Perspective on Graduate Education in Physical Oceanography", Oceanography, 16, 128-133.

各国の大学院教育をPDたちが比較し、理想的な大学院教育を提案。

Country	Prerequisites	Ph.D. duration	Ph.D. courses education	Total university courses		Total compulsory
				university courses	compulsory	
Australia	BSc (Hons) or BSc + MSc	4 (3 + 2)	3 - 3.5	none	7 - 8.5	3
France	Bac + DEA	5	3	2	8	7
Germany	Diplom	5 - 6	3 - 6	none	8 - 12	5
UK	BSc (Hons) often additional MSc	3 - 4 (1)	3 - 4	0 - 1	6 - 9	3
US	BSc	4	3 - 6	1.5 - 2	7 - 10	5.5

*4th year not generally funded

趣旨

1. 日本における海洋学関係の実態に関する正確な情報の共有

アンケート調査(海洋若手会、大学教員)

学生数、ポスドク数の推移

大学院教育の実態

就職先の現状

2. 海外での状況との比較

3. 将来の海洋学に必要な人材育成、現在のポスドクに関する問題の検討

すぐに解決できる問題ではないがまずは情報共有

具体的にできること、すべきことの検討

将来に向けて議論をしていくことができる場の確保

今回をその第一歩にしたい。

プログラム

- 18:00～18:10 趣旨説明 伊藤進一(教育問題研究会)
- 18:10～18:20 大学院博士課程進学者数・就職先調査結果 吉江直樹(愛媛大CMES)
- 18:20～18:40 ポスドクからみた現状認識 森岡優志(海洋若手会)
安中さやか(国立環境研)
- 18:40～19:00 民間企業で必要な人材、民間企業での博士取得者の役割
森 康輔(JFEアドバンテック)
竹内一浩(いであ)
- 19:00～19:30 大学院における研究者養成の現状と今後の展望について
三寺史夫(北大院地球環境)
博士課程修了者のキャリア多様化についての大学の取り組み
松山優治(東京海洋大)
- 19:30～19:50 海外と日本での人材育成の比較
井上龍一郎(海洋研究開発機構)
平田貴文(北大院地球環境)
- 19:50～20:30 総合討論 座長:伊藤進一(教育問題研究会)
私たちに今できることは何か。
将来に向けてすべきことは何か。

綜合討論

総合討論

ターゲット1. 実際の大学院博士課程への進学者数の実態を調べるとともに、現在の大学院での教育内容、修了後の就職先等を海外の例と比較し、日本の現状を考察する。海洋若手会ボランティアの協力で就職先を調査。

1. 今回の調査で十分か？
　日本全体をカバーする調査は必要？
　定期的な調査は必要？
　PDに関する調査は？
2. 日本における就職先の現状はこれでいいのか？
3. 日本における需要(あるいは学生の希望)と実際の就職先はマッチしているのか？
4. 現在の大学院教育と社会の需要or実際の就職先のニーズは整合的か？
5. 日本の海洋学におけるPD問題の深刻さは？

総合討論

ターゲット2. これらの情報をもとに、将来の海洋学のため、人材育成・ポスドク問題についての認識を共有し、その具体的な解決策についての意見・情報を交換する。

1. 日本における理想的な大学院教育を検討する場(ワークショップorワーキンググループ)を設けてみてはどうか？
2. 博士課程でのJAMSTEC、気象庁、水研のような国研系期間への1ヶ月(夏休みとか)の研修プログラムを考えてはどうか？(JAMSTECの工学系と事務系では既に試みている)
3. 海洋系測器会社、コンサル等、民間会社への1ヶ月(夏休みとか)の研修プログラムを考えてはどうか？
4. JPGUやOSMでのキャリアパス支援プロジェクトのようなものを海洋学会で行ってはどうか？(できれば事前にキャリアパスアンケートを企業に実施する？)
5. これとは別に大学院進学者数等の推移について定期的な調査と分析が必要？